

長崎いのちの電話 開局 20 周年記念公開講演会



「寄り添うということ」

「ペコロスの母に会いに行く」著者 岡野雄一氏

講演会には316名もの方が集まり、関心の高さが伺われました。長崎市出身の『ペコロス』こと岡野雄一氏は母・みつえさんと過ごした日々を笑いと涙で語り、会場を温かい雰囲気包みました。以下、講演の抄録です。

「ペコロス」の誕生

64歳になりますけど、頭こんな感じになってしまいました。60歳過ぎて、こういう拡がりがあるとは夢にも思わず過ごしていました。いまだにちょっと驚きの連続なんですけど、こういう風に皆さまの前に立って、喋ることがあるなんて、1～2年前までは思いもしませんでした。時々いろんな所に呼んで頂いて、禿げた息子が、車椅子の母に会いに行ってるだけの話をずっとしております。

その母が八月の末、91歳で亡くなったので、その後、ずっと、秋冬というふうに淋しい季節になっていくというのは、実感として今頃湧いてきております。

父が亡くなって、母と一緒に暮らしていたんですけど、ご近所の方から、「火事が一番怖かとさね。」と言われたり、帰って来た時にガス警報器が鳴っていたことも2、3回あったし、いろいろありました。どんどんどんどん母から台所仕事を取り上げていったということを切なく覚えております。

長崎で編集の仕事はないと思ってたんですけど、夜の長崎の店を紹介する本を出してみないかということで、その本を何人かでやるようになりました。その本の中に、途中から八コマ漫画を描かせてもらうようになり、その素材は、その月その月にあったいろんな出来事、自分が遭遇した出来事を、面白おかしく描いてたんですけど、だんだん母のエピソードが出てきたんです。

そのエピソードの漫画を見たサラリーマンの方が、「うちが全くこんげん感じなんですよ」って、しみじみおっしゃいました。やっぱり反応のあるエピソードをどんどん描くようになるので、母の失敗を、今か今かと待ちながら、何かしでかしたら、「ネタ貰った！」みたいな感じで、漫画を描いてたのを覚えております。あとでいろんな人に「そういう状況がすごく良かった。ネタ待ちで母

が失敗するのを待っていると、気持ちが落ち込まない、鬱にならない、一番良い対応の仕方なんです。」と言われました。

母は9年間グループホームでお世話になりました。こうやって頭ベシベシ叩いたりするような事がありましたけど（動画）、あれは何で叩いてたかと言うと、風船と間違えてたらしいんですね。皆さん車座になって風船をこうやって、「イチ、ニ、サン…」と、「100まで続けましょうねえ」みたいな感じでやってるんですけど、“そう言えば母ちゃん、俺の頭を叩きながら数を数えたりするなあ”と思って、“そうかあ、風船と間違えてるのかあ”みたいな感じで納得した。手を上げるというのは絶対にリハビリになるから、一生懸命叩かせてたんです。

父との和解

1年半前に母が胃瘻(ろう)をしたのですが、悩みに悩んだ末、一日でも長く生きて欲しいということで胃瘻を選択したんです。

だんだん動かなくなって、息だけしているという母を、僕は小一時間その横で座ってじっと見てるだけだったんです。何かすごく豊かな時間を過ごしている感じがあって、“何てこう、母ちゃんから貰うものが多いんだろう”と思いながら座っていた時期が、後半ずっと続きました。その感じる気配を漫画に書いていましたから、確かに、感じるもの全部が“飯の種”だと思いながら過ごしていました。

取材を受けることで知ることも結構ありまして、一昨日、「お母さんは死ぬ間際、胃瘻(ろう)をした後、岡野さんにお父さんと息子さんの和解をさせてくれたんじゃないですか」という共同通信の記者さんから言われたことは、目から鱗でした。

胃瘻(ろう)をした母を看にきてる1年半くらいの間に、父ちゃんのことを良く考えられるように確かになって、母ちゃんの所に父ちゃんが訪れるという風に思ってたですね。気配を感じるようになって、それがやっぱり母が感じてであろう父ちゃんと同じ、いや、母の前に現れるであろう父ちゃんと同じ、笠智衆みたいになった、酒

も止めた後の、いい感じのおじいちゃんというのが気配として感じたんですけれど。ということ思い出して、「あ、そうか、母ちゃんがもし居なかったら、こういう風にいい感じの父ちゃんと対面する（気配を感じるだけなんですけど）、ということはなかったんだと思えば、本当に母が最後の最後に僕と弟とを、父と和解をさせてくれたというのは素晴らしいことだなあ」と思ったのを覚えております。

プチ親不孝

親御さんが認知症になると真面目なお子さんは、一緒に看んといかん、一緒に自分がおらんといかんということで、共倒れするパターンを何人か周りで見してきましたが、ちょっと距離をおくというのが一番大事だと思います。「認知症」「介護」というキーワードで僕の本は広がっているんだと思いますが、僕は施設に預けることを「なんて手抜きなんだろう」と、入れると決めた時にやはり後ろめたく思えたのを思い出します。でも後でいろんな人から、それは大事なことだというようなことも言われました。在宅で一緒に見て、何もかもやろうとして共倒れするというパターンはやっぱり良くない。見るほうが倒れるというのは元も子もないので、僕はプチ親不孝というのが一番かなと思います。言い換えたら適度な距離だと思います。

そして、母が自分の一番いい時代をばらばらなまま思い出すという事がよくありまして、時間列はぐちゃぐちゃなんですけど、一番苦勞した時期はもう出てこない。父から包丁で追われたという時代、そういうエピソードは母の中から消えているんですね。

多幸症という言葉がありますけれど、認知症になって、悪い事ばかりでない。要するに人生の一番最後に、いい時代に戻って行くというのも、なかなかいいんじゃないかと思えます。母もそういう表情を見せることがよくありました。しっかりしているときは「母ちゃん、なんでこんなしっかりし過ぎるんだろう」と子ども心に思うくらいにしっかり者だったんですけれど、認知症になってから初めて見る母の笑顔というのがありまして、僕が会社に行こうとしていると、「ゆういちー」と呼ぶから振り向くと、窓から童女というか子どもに戻った顔でくしゃくしゃと笑いながら嬉しそうに僕に手を振っているんです。見たこともない表情だったので、携帯で写真に撮って弟に送ったら、弟も「涙出たよ。」とメールを戻してくれたんです。そういう面もあるんで、「認知症」即「不幸」だけではないんじゃないかと思っております。僕の適度な距離感というのが、たぶん共感を得たりもしている。

自費出版で本を出したときに一冊目は全然売れずに、2冊目を出した時に、幸い僕の目の前で買ってくれたおじいちゃんがいたので、お茶に誘って小一時間、いろいろ

喋りました。そのおじいさんは郊外の大きな施設の施設長さんだったんですが、「今からどんどんこの時代は認知症という介護の時代は続いていくので、若い人もこの仕事で入ってくる。その子達にいろんなノウハウは教えることはできるけど、想いを馳せるということはなかなか教えづらいですよ。目の前にいるおじいちゃんおばあちゃんが、今までどういう人生を経てここにいるのかということに想いを馳せてくれるのがこの本なんです。」とおっしゃいました。僕は目から鱗というか、なるほど、そういうことなんだと思ったのを覚えております。だから今、時代と遭遇しているというのが実感です。

当分こういう時代が続くでしょうけれど、この認知症介護のキーワードの中に、結局、母が亡くなったことには、死を見つめることなんだなということを実感として思っています。どういう風にきちっと着地するかというのが大切なことなんだなと思います。それも本人にはできないので、どうやってきれいに着地させてあげるかということも含めて、百人いれば百通りなんですけど、認知症は多幸症の面もある、だから悪いことばかりじゃないという感じで暮らして頂ければと思います。介護している人、今は、「ケアする人のケア」という言葉もあるように、見る人が鬱になっていく時代なんで、プチ親不孝で適度な距離というのを心掛けて、お父さんお母さんに長くいい時間を過ごさせてあげてください。

亡くなる前に家族会があって、死ぬ1日前の母に会って、携帯で写真に撮って「母ちゃん、こんげん元気か顔しとる」と弟に送ったら、弟から「これはまだまだやね。」と笑いながら、メールが戻って来たんです。その次の日に、いきなりホームから電話があって、「お母様がなくなりました」と伝えられました。1日前に行っていてよかったなと今でも思い出します。母が亡くなってしばらくして、妻が僕に「どうしよう」と言うんです。「おかあさんのおらんごとなって漫画かけんとじゃなか？」そう心配してたんですけれど、僕は「認知症」「介護」というくくりでたぶん広がりを見せているのだと思います。そういう時代との遭遇で広がっていると思うんですけれど、僕が書いているのは、あくまでも自分の周囲何メートルかのところの出来ごとで、その中に母ちゃんがぼつんといてという感じで描き続けてきていました。今でも、母がなくなった自分の事、あるいは空にいて見下ろしている母のこと、ちょっと時代を遡って昔の母のことをいろんなことをそのままのペースで書いていきたいと思っております。今後ともよろしくお願いします。

